

日本刀にまつわる逸話の変遷 —鬼丸国綱を対象として—

田中 雅也

本稿は、古くから人々の暮らしと密接な関わりを持ってきた日本刀の受容の実態を捉えることを目的とする。日本刀に関する逸話を扱う研究は、これまで皆無ではないものの、単一の作品内での日本刀像の分析に留まるものや、庶民の間で日常的に使われた日本刀に関する語りを取り扱った研究がほとんどであり、一つの日本刀に焦点を当ててその逸話を通時的に考察する研究は未だに見られないのが現状である。そこで本稿では、鎌倉時代に鍛えられ、広く現代までの人口に膾炙した日本刀である鬼丸国綱に焦点を当て、最も古いとされる『太平記』における逸話から、現代の書籍や映像メディア、コンテンツに登場する逸話の語りにわたる 56 点の資料を収集・分析し、鬼丸国綱に対する印象の変遷とその背景について考察を行った。

分析の結果、室町時代には鬼丸国綱は『太平記』を通して持ち主を守る刀として語られるものの、江戸時代には不吉な刀として語る文献が登場することがわかり、これは歴代の持ち主が辿った不幸な末路に起因すると考察した。また、昭和期の文献において見られた、斯波高経や足利将軍家の鬼丸国綱に対する過剰な執着も鬼丸国綱に対する不吉な印象の増長につながっていると考えられる。その後、平成期以降は、「守護刀」と「不吉な刀」としての描写は混在する資料が多く見受けられるようになった。加えて、「靈妙」や「ミステリアス」といった言葉が用いられる例も確認できた。このように、鬼丸国綱は守護刀から転じて不吉な刀として語られるようになったものの、その後は語り手によって様々な印象で認知され、思い思いの脚色を施す形で新たに逸話が語りなおされていることがわかった。

一方で、鬼丸国綱に対する印象が守護刀から不吉へと変化していない文献も、江戸中期の『安斎随筆』から現代にわたって確認された。したがって、鬼丸国綱が不吉ではなく名剣として語り継がれる伝来形態も存在していたことがわかった。そして、背景として地域によって鬼丸国綱に対する印象に差があることが、逸話の内容に反映されているのではないかと考察した。また、鬼丸国綱の不吉について語る文献においても、同時に名剣として紹介する項目があることから、鬼丸国綱の持つ名剣としての側面は不吉な語りの生まれた後の社会においても残り続けているのではないかと考察した。また特定の地域においては他の文献とは異なる地域に根差した形での逸話が語り継がれていることも判明した。

本研究の成果は、鬼丸国綱に関する逸話が不吉なものであるという今までの研究の成果に加えて、鬼丸国綱にまつわる逸話の内容の変化を具体的かつ包括的に示すことができた点、および不吉な印象とは異なる伝来形態があることを明らかにし、こうした複数の伝来形態が併存した背景について仮説を提示した点にある。また、本研究によって得られた知見は他の日本刀の逸話研究や、さらに広く民話研究一般にも資するものであると考えられる。

(指導教員 村田 光司)